

奈良のこと (古都)

(6) 元興寺・ならまち

猿沢池の南側に「ならまち」があり、殆ど全域が元興寺の旧境内にあたる。奈良は太平洋戦争の時に空襲を受けなかったため、江戸時代以降の町屋が多数残っている。

奈良市では「都市景観形成地区」として、町屋の買い上げなどを行い保存に努めている。

この歴史的景観と、町屋の原型を保ちつつ現代風に改装された飲食店や雑貨店などで、今は女性を中心にした観光客の人気スポットとなっている。

元興寺

蘇我馬子は588年に飛鳥で、氏寺として日本で最古の本格的寺院である法興寺（飛鳥寺）を創建した。日本初の屋根瓦を葺いた寺院で、百濟から呼んだ瓦博士の指導で焼かれた日本初の瓦は、今も数百枚が残っている。



平城京への遷都に伴い、718年に奈良に移り元興寺となった。奈良時代の伽藍は、南大門、中門、金堂（本尊は弥勒仏）、講堂、鐘堂、食堂が一直線に並び、講堂の背後には東西に数棟の僧房があった。

その後、1451年の土一揆で殆どを失い、残っていた五重塔も江戸末期の1859年に焼失した。衰退した蘇我氏に力はなく再興しないまま、民家が建ち市街地となっていった。

現在の本堂（極楽坊）と禅室は何れも国宝で、創建当初は僧坊であった。鎌倉時代に改造され現在の形になっているが、瓦や柱の一部は飛鳥での創建当初のものである。

本尊は「智光曼荼羅」で、天平時代の学僧智光が夢に見た極楽浄土の様子を絵師に描かせたもので、原本は焼失して無く、今は板絵（重要文化財）が残っている。

国宝の五重小塔は通常の十分の一の大きさに作られており、高さ5.5mと小型であるが、非常に精巧な作りから奈良時代の塔の構造がよく分かるといわれている。

境内には沢山の五輪塔や地蔵が祀られているが、すべて「ならまち」（旧境内）から出土したものだそうである。

ならまち

元興寺焼け跡に出来た町のためか、迷路のような道が多く、ガイドの私たちでも道を間違えることがあるほどで、立ち往生した観光客に道を聞かれることも珍しくない。

ふるさとの あすかはあれど あをによし ならのあすかを みらくしよしも

大伴坂上郎女（万葉集 巻6-992）

元興寺が飛鳥から平城京に移ってきたとき、飛鳥を懐かしんで詠ったもので、この辺りを「平城（なら）の飛鳥」と呼んでいる。飛鳥小学校の呼称に名残を留めており、歌碑は瑜伽神社の一の鳥居から83段の石段を上った所と元興寺五重塔跡にある。

奈良時代から社寺の保護の下で商業や手工業が発展して来た町である。室町時代の土一揆以降、町民は自立をしてゆき、筆、墨、蚊帳、晒、布団、刀、酒、醤油などで、産業の町として発展する。江戸時代中期以降は、東大寺や興福寺、春日大社の門前町として栄えた。

明治になってからは、「ならまち」にも文明開化の波がおしよせ、牛肉店、洋髪の散髪屋、カステラ屋などができた。

「テイチクレコード」は大和蚊帳の富豪吉川嶋次の資金援助で、南口重太郎が設立した「帝国蓄音機株式会社」が始まりである。

庚申堂：

ならまちの中心にあり、「庚申さん」と呼ばれている。庚申信仰の奈良の拠点であり、青面金剛像を祭祀する祠で、屋根の上には三猿が飾られている。

青面金剛の使いである猿を型取ったお守りは、「身代わり猿」と呼ばれ、魔除けとして町内の家々の軒先に吊るされている。大中小とあり、お土産に人気がある。

五重塔跡：

江戸末期まであった塔は、寺伝では高さ73mといわれ、興福寺の五重塔と並び遠くからもよく見えたようである。今は基壇と礎石を残すのみになってしまった。基壇には大きな桜の樹があり、春には満開の桜と花びらに飾られた礎石が美しい。

御霊神社：

奈良時代から平安時代に掛けて、政治の陰謀などで命を失った人の御霊・怨霊を鎮めるためお祀りしている。

井上（イガミ）皇后と他戸（オサベ）皇子（光仁天皇の皇后と皇子）

早良親王（崇道天皇）（光仁天皇第2子、桓武天皇の弟）（流罪、途中で死亡）

伊予親王と藤原吉子（桓武天皇の皇子と皇后）（伊予親王の変、二人は自殺）

藤原広嗣（藤原不比等の孫：式家）（聖武天皇の時九州で反乱：藤原広嗣の乱）

文屋宮田麻呂（文大夫）（843年謀反の罪で流罪：後に無実）

橘逸勢（空海、最澄と同期の遣唐使、842年謀反の罪で流罪：途中で病没）

吉備真備（吉備大神）（遣唐使2回、二度目は鑑真を伴って帰国）

菅原道真（火雷神・天満宮の祭神）（藤原時平との争いに敗れ太宰府に左遷される）



中将姫

中将姫は右大臣・藤原豊成（藤原武智麻呂の長男で藤原不比等の孫に当たる）の娘である。継母にいじめられ暗殺されそうになるが、大和国雲雀山に逃れ、その後当麻寺（たいまでら）に入り尼となった。

「ならまち」には、中将姫に関わるお寺が沢山ある。

誕生寺：中将姫の生まれたところで、父・藤原豊成の邸跡とされる場所である。

徳融寺：豊成と中将姫を祀る石塔が二基並んで建っている。

この石塔は元々高林寺にあったものが、1667年に移されたようである。

姫を題材にしたものは多く、謡曲「当麻」、謡曲「雲雀山」、浄瑠璃「ひばり山姫捨松」、歌舞伎「中将姫雪責」、歌舞伎「蓮華糸恋曼荼羅」などである。

歌舞伎「中将姫雪責」を上演する前には、役者がお墓に参るそうである。

高林寺：豊成の邸跡で、ここに豊成の墓（直径2.5mの円墳）がある。

また、本堂には豊成と中将姫の座像が安置されている。

墓の前に白牡丹の木があり、中将姫ご縁日の4月13日には、その年の寒暖に関係なく、不思議にも必ず美しい白牡丹の花を咲かせる。

中将姫の伝説：

姫は輝くばかりの美貌と才能に恵まれ、和歌や音楽の才能にも優れていた。継母の照日前はこうした姫を憎み、11歳の時、豊成が流罪で不在となった隙に姫を暗殺しようとした。しかし、姫は家来に助けられ菟田野の雲雀山（青蓮寺）に匿われる。

姫は3年後に狩りに来た父親（豊成）に発見され奈良に連れ戻され、13歳の時に中将の内侍となり、中将姫と呼ばれるようになった。16歳の時、栄華を望まない姫は仏に仕える決心をして、二上山山麓の当麻寺に入る。

当麻寺では、「百駄の蓮華の茎から繊維をとって曼陀羅を織るがよい」という仏の言葉を聞き、仏の助力を得て、一夜にして当麻曼荼羅（国宝）を織ったとされている。

29歳の時、生身の阿弥陀如来と二十五菩薩が現れて、仏道に精進を続けた中将法如を生きながら西方浄土へ迎えたといわれる。

毎年5月14日に行われる当麻寺の「練供養会式」は、この様子を再現したものである。

終わりに

奈良市の世界遺産を中心に書いた。

奈良市内には他にも新薬師寺、白毫寺、柳生（滝坂の道、剣豪の里）、清澄の里（正暦寺、弘仁寺）、佐保・佐紀（法華寺、秋篠寺、佐紀盾列古墳群（さきたてなみこふんぐん））や映画「殞（もがり）の森」のロケ地：田原の里など素晴らしい所がいっぱいある。

1200年前の息吹の残る古き良き奈良へ、是非遊びにおいで下さい。

（ご希望でしたら、筆者がボランティアでガイドをします。）

（色染・昭35 坂東久平）